

タイトル:理不尽さから強くなる

私が中学1年生の頃、やりたくもないのに応援団に入団した理不尽な経験から、応援の素晴らしさを学び、理不尽な経験は“自分にとって新たな経験”だから、そこから多くを学び、強さと、自分自身を応援することを知りました。そんなエピソードを紹介します。

エピソード内容:

あなたは、応援団で応援したことはありますか？

『フレッツ、フレッツ、鈴木』

『フレツ、フレツ、鈴木！フレツ、フレツ、鈴木！ワー————！！！！』

『オス！！！！』

鈴木さんが選手の名前であったり、学校名あったり、と応援団にはそれぞれの応援の型があります。

声の出し方に始まり、アクションの付け方やスタイルはその応援団によって違って、さまざまに存在します。

私は以前、応援団に入っていました。

しかし、応援団に入りたくて入ったのではありません。応援団をやらされていたのです。

当時、私は13歳。中学校1年生でした。

中学に入学して、野球が三度の飯より好きな私は、野球部に入部しました。

4月に入部してまもなく、中学生の総合体育大会が、夏の期間に行われます。

その大会に向けてクラスから1名を応援団に派遣し、皆で体育大会の各スポーツの試合を応援して盛り上げる…それが、その学校のルールでした。

応援団に派遣される、クラスのその1名に私が選ばれました。

出席番号順だったか、あいうえお順だったか、なぜ選ばれたのかは、いまとなっては覚えていません。

そんな中で応援の練習を、放課後に毎日、野球部に入部して1か月後から期間限定ではあるものの、意味もわからず、応援団の練習に参加することになりました。

やりたい野球をせずに、やりたくもない応援団に入らされ、やりたくもない応援の練習をする。

校舎の屋上での応援練習は、ほとんど真夏の炎天下で、日陰などありません。なかなか辛いものがありました。

そこで行われる応援の練習は、未体験なことばかりでした。

声の出し方、姿勢、足の出し方、手ぶりのスタイル…どれもこれも知らないことばかり。

先輩の応援をみようみまねで、学ランを着て、額には白い鉢巻をし、炎天下ですから汗だくになって練習します。

なんで応援団の練習をしているんだっけ？俺って野球部だよな？

小休止の際に、屋上から学校のグラウンドをみれば、野球部が練習をしています。同級生は、その中にいて、自分は応援団の練習・・・

やりたいはずの野球がなぜかできない、今考えれば、理不尽、ということにあてはまるのでしょね。

なんで野球の練習ができないんだ・・・と家に帰れば、自主練習をバットで素振りをしながら思い、勝手に悔し涙もでてきました。

今の時代なら、やりたくないことを無理強いされて、ということで終わらずに、ちゃんと自己主張して野球部に戻ればいいじゃないか、ということかもしれません。

しかし、ここで言いたいのは、この理不尽なことにも学びがある、ということなのです。

その当時の私は「忍耐」という言葉が好きでした。選ばれたならば、やるしかありません。

やりたくないけど、悔し涙もだしたけど、耐え忍ぶんだ、苦しい応援の練習も野球をやる時の体力づくりだと思ってやろう、と無理やりに思いこみ、半ば意地になって真剣に応援団の練習に取り組みました。

総合体育大会で水泳大会での野外プールのスタンド、そして、自分のやりたい野球の試合でのグラウンドで応援団として応援をしました。

その時から今は40年以上経っているのですが、中学1年で応援団に入った、この事で多くを学び、実は、今生きている自分の糧になっている、ということがとても良く分かっています。

やりたい野球ができない時期があって、その後にできるようになった野球への喜び、本当に心から嬉しく感じ、野球ができるってなんて嬉しいんだ、いくらでもトレーニングできるぞ、野球の練習がいくら厳しくたって、野球ができないことに比べれば幸せじゃないか！と解釈するようになりました。

あの時の辛さを思えば、今はなんてことないぞ、というところでしょうか。

そして、実はこの応援団にいたことで応援の型が身体に沁みついていますから、『エールをやって』と言われたら、今すぐにできます。ある意味特技かもしれません。

声を遠くまで通らせる発生もできるようになっているので、人がえっと驚くような声を、とっさの場面で出すこともできます。

応援団の所作を学べたことで、人間として筋を通す、相手を敬う、尊敬することも学びました。

なによりも相手に応援するエネルギーを配ることで、自分に還ってくるエネルギーの素敵さ、素晴らしさを体験感として得ることができたのです。

応援した後に、応援した選手から「ありがとう」「力がでたよ」と声をかけられ、スタンドの大人たちから「かっこよかったね」「元気がもらえたよ」と話しかけられたことが、そんな場面を想像もしていなかった13歳の自分にはインパクトがありました。

応援をする心のエネルギーは、元気を呼び、時には心が震えるほどの感動すら呼び起こすということも、応援団に入ったことによって知ったのです。

応援の力をリアルに知り、その力は、理不尽なことをする中から知ることができた、という体験は、その後、生きていく中で、やりたくないと思ったことでも、まずやってみる、行動してみる、という考え方の下地を作ってくれました。

理不尽だな、と思っても、そこから行動してみると、何かが見つかるということです。

私は応援団で応援するという経験から、現在生きてきた中でも、相手に応援をすると自分にエネルギーが返ってくる体験感がありますが、相手に応援することだけでなく、自分自身を応援することもとても大切だと思っています。

理不尽なこと、嫌なこと、辛いことがあっても、そこから行動すると発見があるぞと良い方向に解釈する。

嫌で辛いからこそ、それを超えれば、逆に自分が強くなれる。

だから、理不尽なことでも、結果、自分のためなるんだ、ということを知っていれば、よし、ちょっと踏ん張ろうよ、行動しようよ、と自分で自分を応援できるはずです。

相手も応援し、自分自身も応援する、そんな風にできると、より良く元気に生きていける、そんな風に考えています。

吉高栄志～電子書籍6号発刊amazon Kindle <https://amzn.to/3ckx8kM>